

Title	『義経記』における畠山重忠
Sub Title	
Author	徳竹, 由明(Tokutake, Yoshiaki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2001
Jtitle	三田國文 No.33 (2001. 3) ,p.14- 24
JaLC DOI	10.14991/002.20010300-0014
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010300-0014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『義経記』における畠山重忠

徳竹 由明

一、はじめに

室町期に成立した軍記物語『義経記』には、源義経、弁慶を始めとして多くの人物が登場する。ところが従来のこの作品に於ける人物像の考察は、義経と弁慶を中心に義経主従を対象としたものがほとんどであり、頼朝麾下の鎌倉方の御家人に関しては梶原景時が悪役として形象されている事の指摘を除いてほとんど為されていないというのが現状である。物語の後半部は義経主従の滅亡が主要な話題であり、義経主従の滅亡は鎌倉方との関係の中で進行していくものである以上、鎌倉方の登場人物の考察も作品の理解のために必要な作業であろう。そこで当論考においては、梶原景時程ではないが物語中に頻出する御家人畠山重忠の人物造型について、『義経記』の重忠登場箇所と同一の場面を持つ他の中世文芸作品と比較対照しながら、考察を試みる。

なお、『義経記』の一貫した作品としての評価は、従来は、例えば義経が一度元服して奥州に下だった後稚児姿で都に戻るといった錯誤が随所に見られる故に低く、研究も物語内の個々の

場面の考察か、特定の登場人物の考察が主流であったが、近年はそれなりの理論なり構想なりを持った纏まりのある作品として見直しが進んでいるようである。⁽¹⁾私も、詳しくは別稿にて論じたいと考えているが、『義経記』が物語る義経主従滅亡の経緯には『義経記』なりの構想があり、その構想に畠山重忠の人物造型が利用されていると考えている。当論考は、『義経記』における義経主従滅亡の構想を考察する前提でもある。

二、畠山重忠の登場箇所

『義経記』における畠山重忠の登場箇所は、以下のaからgの章段である。⁽²⁾なお、中世文芸の中で比較対照すべき同一場面のあるものを下段に記す。

- a、卷第三「頼朝謀反の事」……………吾平真仮
- b、卷第四「義経平家の討手に上り給ふ事」……………吾平幸
- c、卷第四「義経都落の事」……………吾平
- d、卷第六「忠信が首鎌倉へ下る事」……………吾
- e、卷第六「関東より勧修坊を召さるる事」……………吾
- f、卷第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」……………吾幸

g、巻第八「秀衡が子供御追討の事」……………吾

以下、右のaからgのうちgに関しては別稿にて論じる予定であるので除き、aからfの場面について他の中世文学作品と比較検討しながら、『義経記』における畠山重忠像の検討を行ってきたい。

三、畠山重忠像の検討

a、巻第三「頼朝謀反の事」

『義経記』に於いて最初に重忠の名が見えるのは、頼朝平兵に關する場面である。なお当該箇所に重忠を登場させるのは『義経記』の他に『平家物語』、真名本『曾我物語』、仮名本『曾我物語』、『吾妻鏡』である。

……おなじき十九日、さがみのくに、こばやかはのかせんに打まけて、どゐのすぎ山にひきこもり、おうばの三郎、またのゝ五郎、どゐのすぎ山をせむ。……むさしの国には、川越の太郎しげより、小太郎しげふさ、おなじき三郎しげよし、たうには、たん、よこ山、いのまたはせまいる。はたけ山、いなげはいまだまいらず。ちゝぶのしやうじ、お山の別当、ざいきようによりてなり。かつさのくにゝは、ほんま、しぶやはせまいる。大ば、またの、山内はまいらず。……

平……其後畠山五百余騎して御方を仕る。三浦大介義明が子共、三百余騎で源氏方をして、湯井、小坪の浦でたゝかふに、畠山いくさにまけて、武蔵国へひきしりぞく。その後畠山が一族、河越、稲毛、小山田、江戸、笠井、惣じて

其外七党の兵ども、三千余騎を相具して、三浦衣笠の城におし寄せてせめたゝかふ。大介義明うたれ候ひぬ。……〔寛一本〕巻五「早馬」

真……同廿四日、云鎌倉郡由井小坪処、佐殿所憑軍士三浦

一族與畠山次郎合戦、重忠軍破、是平家有志無、父莊司重能京候平家方間、為繼彼首向石橋戦場処行合戦、……〔巻三〕

仮……その中に、畠山重忠は、父重能・叔父有重、折節、

平家の勘当にて、京都にめしおかるゝ最中なれば、その科をもはらし、国土の狼藉をもしづめんとむかひけるが、三浦党、頼朝の謀叛に與力せんとして、はせむかひけるが、鎌倉の由比といふ所にてゆきあひ、さんぐにたゝかひけるが、重忠うちをとされて、希有の命いきて、武州にかへりけり。……〔巻二「兼隆がうたるゝ事」〕

吾……三浦輩城出来于丸子河邊。自去夜相待曉天、欲參向之処、合戦已敗北之間、慮外馳帰。於其路次由井浦、与畠山次郎重忠数寇挑戦。……重忠退去。（治承四年八月廿三日条）……武蔵国畠山次郎重忠且為報平氏重恩、且為雪由比浦会稽、欲襲三浦之輩。仍相具当国党々、可来会之由、触遣河越太郎重頼。……此事風聞于三浦之間、一族悉以引籠于当所衣笠城。……〔同廿六日条〕……辰寇、三浦介義明年八、為河越太郎重頼、江戸太郎重長等被討取。……〔同廿七日条〕

さて『平家物語』、『吾妻鏡』の記事から明らかなように、頼朝平兵当初、重忠は実は平家方に与して謀反人頼朝に味方した三

浦一族と由比小坪、衣笠城で合戦を行い、頼朝に帰伏したのは『吾妻鏡』によれば治承四年十月四日、武蔵国長井渡においてである。真名本『曾我物語』も仮名本『曾我物語』も由比小坪における合戦を叙述し、頼朝の忠臣としてのイメージの強い重忠が頼朝に敵対した理由を当時在京して平家の許にいた父畠山庄司重能、叔父小山田別当有重を助けるためと説明しているが、『義経記』においては重忠の三浦一族との合戦を記さず、頼朝への帰伏が遅くなった点のみを記し、その理由を父叔父の在京に求めている。『義経記』が公然の事実である重忠と三浦氏との合戦を語らないのは、もちろん依拠資料等の問題である可能性もあるが、後に検証する場面における重忠像を考えるに、賢人にして頼朝の忠臣である重忠像にとってマイナスなイメージである三浦氏との合戦を敢えて語らなかった可能性もあるのではないだろうか。

b、巻第四「義経平家の討手の上り給ふ事」

続いて重忠が登場するのは、大臣殿父子を伴って鎌倉へ下向した義経が、梶原の讒言によって腰越に留められる場面である。なお『義経記』以外に当該箇所を有するのは、『平家物語』、幸若舞曲『腰越』、『吾妻鏡』である。

……又はたけ山殿を召して仰けるは、川ごえに申候へば、したしくなりたるとかなはじと申候。さればとて世をみだらんとふるまひ候九郎を、うちこめてをくべきにあらず。御へんむかはせ給候べし。きちれいなり。さも候はゞかねて伊豆駿河兩國をたてまつらんと仰られければ、はたけ山殿、よろづにはゞからぬ人にて、御詮はそむきがたく候へ

ども、八まん大ぼさつの御ちかひにも、たのくによりわがくに、たの人よりもわが人をまもらむとこそ承候へ。他人としたしきとをくらぶるに、たとふるかたなし。かぢ原と申は一たんのたよりによりてめしつかはるゝ物なり。かれがざんげんによりて、ねんらいのちうと申、御きようだいの御中と申、たとひ御うらみ候とも、九こくにてまいらせられ、げんざん候て、しげたゞに給候はん伊豆駿河二國をけんじやうのひきで物にまいらせ給候て、京とのしゆごにをきまいらせられ候て、御うしろをまもらせ給候はんほどの御心やすき事は、なにごとか候べきとはゞかる所なく申すてゝぞたゞれける。二ゑどの、ことはりとおぼしめしけるにや、そのゝちはおほせ出さるゝこともなし。こしごえには、このことをきゝ給ひて、やしんなきむねすつうのきしやうもんをかきしんぜられけれども、なを御せういんなかりければ、かさねて申しやうをぞまいらせられける。

平

……判官思はれるは、……たとひいかなる不思議ありとも、一度はなどか対面なかるべき。凡は九國の惣追捕使にもなされ、山陰・山陽・南海道、いづれにてもあづけ、一方のかためともなされんずるところと思ひつるに、わづかに伊予国ばかりを知行すべきよし仰せられて、鎌倉だにも入られぬこそ本意なけれ。……たとへばおなじ父が子で、さきにむまるゝを兄とし、後にむまるゝを弟とするばかり也。誰か天下をしらんにしらざるべき。あまッさへ、今度見参をだにもとげずして、追いのぼせらるゝこそ遺恨の次第なれ。謝するところを知らずとつぶやかれけれどもちか

らなし。まったく不忠なきよし、たび／＼起請文をもつて申されけれども、景時が讒言によつて、鎌倉殿もちゐ給はねば、判官なく／＼一通の状をかいて、広基のもとへつかはす。……（「寛一本」巻第十一「腰越」）

幸……其後、又伊勢の三郎吉盛をもつて、土肥の次郎して申されけれども、是も梶原が中にて心得、とく／＼御上り候へと申付けて候に、長々逗留召さるこそ、心許なく存ずれ。此度の勸賞には、伊予の国一ヶ国を申預け奉る。別して忠のあらば、追つて九国の御代官を申預け奉らんとこの御意にて候と、吉盛を返す。吉盛、やがて立ち帰り、酒匂の宿に参り、此由かくと申あぐる。義経聞し召されて、こはいかに。木曾義仲を誅戮せしよりこの方、平家を三年三月に攻め靡け、三種の神器、自己なく二度帝都に納め申、頼平家の大将、大臣殿父子生捕つて、是まで下りたる義経に、いかに讒臣ありとても、一度の対面は、などかは無ふては有べきぞ。是も思へば景時が讒心によるなれば、頼朝に恨み、更になし。全く不忠なき由を、諸寺諸社の牛玉宝印の裏をもつて申され共、是も梶原が讒訴によつて叶はず。義経無念に思召、いかに、武蔵、聞くかよ。一通の状を書きて参らせ、頼朝の御目につけて、返事によつて、とも角も計らふべきにて侍る也。それ／＼、武蔵と仰ければ、弁慶承て、墨磨り流し、筆に染め、草案迄もなくし、只一筆にぞ書きたりける。……（幸若舞曲「腰越」）

吾……源廷尉義経、如思平朝敵訖、剽相具前内府参上。其賞兼不疑之處、日来依有不儀之間、忽蒙御気色、不被入鎌

倉中。於腰越駅徒涉日之間、愁鬱之余、付因幡前司廣元、奉一通款狀。廣元雖披覽之、敢無分明仰。追可有左右之由云々。彼書云。……（文治元年五月廿四日条）

さて、当該箇所の前後の主たる状況の推移に関しては、幸若舞曲『腰越』と『吾妻鏡』が「義経酒匂にて鎌倉入り不許可の報を受ける」↓「腰越状」を作成」となっているのに対し、『平家物語』、『義経記』は「義経腰越にて鎌倉入り不許可の報を受ける」↓「腰越状」を作成」となっていて、『義経記』の構成は『平家物語』に近い。ただ、当該箇所に頼朝による義経追討の下令並びに重忠の登場があるのは『義経記』のみである。重忠は梶原景時の讒言によつて義経を危険視し、義経追討を命じた権力者頼朝に対して、「よろづにはばからぬ」性格によつて源氏の氏神である八幡大菩薩の誓うところの「正論」を以て義経を庇つて追討の不当性を頼朝に納得させ、頼朝は一旦義経追討の思考を中止しているのである。鎌倉から至近の腰越にて追討の軍勢を受けるといふ義経の絶体絶命の危機を回避させていると同時に、一方で頼朝が梶原の讒言によつて無実の弟を殺害するという過ちを犯すのを防いでいるといえるであろう。また興味深いのは『義経記』に先行する『平家物語』において、義経自身が述べ義経が傲慢であるかのような印象を与える九州を所望する言説（傍線部①）が、『義経記』では引用箇所直前の義経の独白部分には無く、「正論」を語る重忠によつて代弁されており（傍線部②）、義経が傲慢であるとの印象を与えないのと同時に、義経にこれまでの勲功により九州を治めさせるのが当然のことであるような印象を与えているのである。

c、巻第四「義経都落の事」

続いて、重忠が登場するのは、刺客である土佐坊が逆に義経に誅されて頼朝義経兄弟の対立が決定的となり、鎌倉の軍勢が上洛する場面である。なお、『義経記』の他に当該箇所を有するのは『平家物語』と『吾妻鏡』である。

……ともかくにもうつてをのぼせよとて、ほうでうの四郎ときまさ大ぜいにてみやこへのぼり、はたけ山は先度じたひ申たりけれども、かさねて仰られければ、むさし七たうあひぐして、おはりのくにあつたの宮まではせむかふ。ごちんおやまの四郎ともまさ一千余騎にてくはんとうをかどでするとぞきこえける。十一月一日たゆふはうぐはんよしつね、にしの宮の三位をもつて、ゐんの御所にそうもんせられけるは、……せんずる所あふさかのせきよりにしを給はるべきよしをこそぞんじ候へども、四こく九こくばかりを給はりてまかりくだり候はゞやとぞ申されける。

平……鎌倉殿に此由申ければ、舍弟参河守範頼を討手にのぼせたまふべきよし仰られけり。頻に辞申されけれ共、重而おほせられける間、力及ばで、物具していとま申に参られたり。わとのも九郎がまねし給ふなよと仰られければ、此御詞におそれて、物具脱ぎをきて、京上はとゞまり給ひぬ。全不忠なきよし、一日に十枚づゝの起請を昼はかき、夜は御坪の内にて読あげく、百日に千枚の起請を書いて、まいらせられたりけれども、かなはずして終に討たれ給ひけり。其後北条四郎時政を大将として、討手のぼると聞えしかば、判官殿鎮西のかたへ落ばやと思ひたち給ふ処に、

……〔寛一本〕巻十二「判官都落」

吾……還御之後、召義盛景時、明日可有御上洛。聚軍士等令着到之、其内明曉可進発之者有哉、別可注進其交名之由、被仰含云々。及半更各申云、群参御家人、常胤已下為宗者二千九十六人、其内申則可上洛之由者、朝政朝光已下五十八人云々。（文治元年十月廿四日条）……今晚、差領状勇士等、被発遣京都。……（同廿五日条）

さて、当該箇所の前後の主たる状況の推移に関しては『吾妻鏡』が、〈土佐坊義経を襲撃〉→〈義経院宣を受ける〉→〈鎌倉の軍勢上洛〉→〈土佐房斬首〉→〈義経都落〉と推移していくのに対し、『平家物語』、『義経記』は範頼の没落の有無は別として共に、〈土佐房義経を襲撃〉→〈土佐房斬首〉→〈鎌倉の軍勢上洛〉→〈義経院宣を受ける〉→〈義経都落〉と続き、また上洛する軍勢の主体が『吾妻鏡』は小山朝政結城朝光兄弟であるのに対し、『平家物語』、『義経記』は北条時政であり、『義経記』はやはり『平家物語』を踏まえているようである。⁽⁸⁾ところが『平家物語』は『吾妻鏡』同様当該箇所に重忠を登場させず、重忠を登場させるのは『義経記』独自の趣向であり、重忠は先発した北条時政に続いて尾張国熱田宮にまで軍を進めている。なお重忠が軍を進めたのは「先度」は辞退したが「かさねて」の頼朝の下令であつたからとされているのであるから、明らかにで考察した巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」を踏まえていることが分かる。なお重忠の進軍に関しては、頼朝の御家人である土佐房を義経が斬首したことによって頼朝義経兄弟の対立が決定的且つ公然のものとなつた以上、頼朝の御家人として当

然の行為であるが、刑部久氏が述べる如く一度は「正論」によって義経追討を辞退した「果断にして且つ慎重な」重忠が「馳せ向かふ」という形で尾張国熱田の宮まで急行」していることにより「関東の圧力による義経の絶体絶命の状況を強く印象づけるようにしたもの」であろうと同時に、あるいは土佐房を刺客として差し向けることによって自ら引き起こした兄弟の決裂を武力によって解決しようとする頼朝の横暴をも印象づけているようにも思われる。

d、巻第六「忠信が首鎌倉へ下る事」

続いて重忠が登場するのは、京都の六条堀川にて舊戦の末自害した義経の臣佐藤忠信の首級が鎌倉に届けられる場面である。なお当該箇所に関しては比較するような記事を有する作品は見あたらない。

……じがいのさま、さいごのときのことば、さまぐに申されければ、かまくら殿、あはれかうのものかな。人ごとにこの心をもたせばや。九郎につきたるわかつたう、一人としてをろかなるものこそなけれ。ひでひらもみるところありてこそ、おほくのさぶらひものの中に、これらきやうだいをばついたりけれ、いかなればとうごくにこれほどのものゝなかるらん。よのもの百人をめしつかはんよりも、九郎が心ざしをふつとわすれて、よりともにつかへば、大こく小こくはしらず、八かこくにをひては、いつれのくにゝても一こくはとぞ仰ける。ちば かさるこれをうけ給はり、あはれよしなきものゝありさまかな。いきてだにもとりくだされたらば、めしもつかはれまいらすべき物をとぞ申け

る。はたけ山殿申されけるは、心もをよばず、よくこそしにて候へ。しにて候へばこそ、君にもかゝる御きしよくにて候へ。いきてとりくだされまいらせて候はんずるには、判官どの、御ゆくゑしらぬことはあらじとて、きうもんつよくせられまいらせなば、いきたるかひも候まじ。つゐにはしぬべきものゝ、よのさぶらひどもにかほをまばられむも、こゝろかるべし。たゞのぶほどのかうのものゝ、日本国を給はるとも、はうぐはんどの、御心ざしをわすれまいらせて、君にけんごつかはれまいらせ候まじき物をやと、のころともなくぞ申ける。……

さて当該箇所では、忠信の自害の様子を聞いた頼朝が「あはれかうのもの」「九郎が心ざしをふつとわすれて、よりともにつかへば、大こく小こくはしらず、八かこくにをひては、いつれのくににても一こくは」と忠信を賞賛したのを受けて、その言葉尻を捕らえた千葉、葛西が「あはれよしなきもののありさまかな。いきてだにもとりくだされたらば、めしもつかはれまいらすべき物を」と忠信の死を無駄死として無化するような発言をする。それに対して重忠は、「……よくこそしにて候へ。しにて候へばこそ、君にもかかる御きしよくにて候へ。……」と「のころともなく」述べて、忠信の死を正しい行為として評価している。頼朝の御前で敵の行為を正当化しているわけではあるが、そもその頼朝の発言が忠信の自害の様子を聞いた上での賞賛であることを踏まえるならば、重忠の発言は忠信の死を正しく評価すると同時に、一方で頼朝の意を正しく汲んだ「正論」であるともいえるだろう。

e、巻第六「関東より勸修坊を召さる事」

続いて重忠が登場するのは、南都にて義経を匿った筈で鎌倉に召された勸修坊が、頼朝によつて尋問される場面である。『義経記』の他に当該箇所を有するのは『吾妻鏡』である。

……かまぐらどの仰られけるは、くはんじゅ坊にたつねとはんずるさしきにはいづくのほどよかるべき。かぢはら申けるは、御ちうもんの下ぐちへんこそよく候へと申ければ、はたけ山御まへにかしこまりて申けるは、くはんじゅ坊の御ざしきのことうけたまはり候に、かぢはらはちうもんの下ぐちと申され候。これは判官どのにくみしたてまつりたりといふ、そのゆへとおぼへ候。さすがにくはんじゅ坊と申は、御ぞくしやうと申、てうかの御しとくと申、とう大寺のゐんじゆにておはしまし候。御きしよくわたらせ給ふによりてこそ、これまでも申くだしたてまつらせおはしまして候へ。さこそ遠国にて候とも、さしきしどろにては、よそのきこえあしくぞんじ候。しもぐちなどにての御とひじやうには一ども返事よも申され候はじ。たゞ当座の御たいめんや候べかるらんと申されたりしかば、よりとも、かくこそおもひつれとて、みすを日ごろよりたかくまかせて、御ざしきにはむらさきべりのたゝみに、すいかんにたてゑぼしにて、御げんざんあり。……やゝあつて人や候と仰られければ、さはらの十郎、わだの小太郎、はたけ山三人、御まへにかしこまつてぞ候ける。

吾 ……南都周防得業聖弘依召参向。豫州師檀之故也。日者小山七郎朝光預置之。今日、二品、有御対面。直及御問答。

仰曰、……（文治三年三月八日条）

さて、当該箇所にて於いて『吾妻鏡』には重忠は登場しない。『義経記』では重忠は勸修坊を尋問する場所をめぐつて梶原景時と争論する。梶原景時が中門の下口での尋問を主張するのに対して、重忠は義経に与してはいたものの家筋も良く天皇の師でもあり東大寺の院主でもある高僧勸修坊を「さしきしどろにては、よそのきこえ」が悪い等の理由で「当座」で尋問することを主張する。頼朝は重忠の主張を容れて「当座」にて勸修坊を尋問するわけだが、結果的に頼朝は勸修坊の返答に感嘆し、勸修坊に勝長寿院の別当職となることを要望するのである。重忠はその「正論」である言説によつて高僧である勸修坊が不当に扱われるのを防ぐとともに、そのような過失を頼朝が犯すことを防いでいるともいえるのである。

f、巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」

続いて重忠が登場するのは、捕らえられて鎌倉へ下された義経の愛人静が、若宮八幡の回廊の真ん中で舞を舞う場面である。『義経記』の他に当該箇所を有するのは幸若舞曲『しづか』、『吾妻鏡』である。

……さてかまぐらどの御さんけいあり。ひがしのくわいろうのなかのまに、かまぐらどのみすをかけられけり。きたにならびては二ゐどのゝまくをひく。……にしのくわいろうのなかのまに、はたけ山がまくをひく。きたはうちゑくのを、を山、うつ宮がまくをひく。みなみにならびては、和田の小太郎、さはらの十郎のまくをひく。……ことに御まへちかく、かぢはらふしが一もんのまくをぞひきたりけ

る。……かまくらのたれか笛ふきぬべき物やあると仰らるれば、和田の小太郎申けるは、はたけ山こそゐんの御かむに入たりし笛にて候へと申ければ、いかでかはたけ山ほどのけんじん第一のいやうのもの、がくとうにならんとは、かりそめなりともよいはじと仰られければ、御説と申てみ候はんとて、はたけ山がさじきへぞゆきける。はたけ山、此しさひを御説にて候と申ければ、はたけ山、君の御内にきりせめたるくどうさへもんつゞみうちて、八かこくのさぶらひのしよし、かぢはらどびやうしあはせて、しげたゞがふきたらんずるは、ぞくしやうたゞしきがくとうにてぞあらんずらむとて、仰にしたがひまいらすべきよしを申給つゝ、三人のがくとうは、ところくよりおもひくにいでたちたり。さへもんのぜうは、……かぢはら平三は、……、はたけ山をぞましかけたる。はたけ山は、まくのほころびよりざしきのていをさしのぞひて、うち見て、べつして色々しくもいでたゞず、しろき大ぐちに、しろきひたゝれに、むらさきがわのひもつけて、おりゑぼしのかたゝをさつとひつたてゝ、松かぜとなづけたるかんちくのやうでうを、いきのしたにてうしをさぐれば、わうしきのをつのてうしにてありける。しばらくねとりすまして、はかまのそばとて、たからかにひきあげて、まくさつとうちあげ、つと出たれば、大のおとこのをもらかにあゆみなして、ぶたいにつとのぼり、すけつねがひだりのかたにぞあなをりける。名をえたるびなんなりければ、あはれ人やとぞ見えける。そのとし廿三にぞなりける。かまくらのこれを御らんじ

て、みすのうちより、あはれがくとうやとぞほめさせ給ける。時にとりてはゆゝしくぞ見えける。しつかこれを見て、よくぞじたひしたりける。おなじくはまふとも、かゝるがくとうにてこそまふべけれ。心かろくもまひたりせば、いかにかるくしくもあらむとぞおもひける。くどうさへもんでんがにきこえたることゝみのていろなり。……わざんはさしはさみたれどもかぢはらはかねにをひては上手なり。はたけ山、名をえたる笛のね、いまにはじめぬことなれども、こゝろも言葉もをよばざりけり。ぜんじをよびて、まひのしやうぞくをぞしたりける。……

幸

……良有て頼朝御対面の其為に、青かり衣に立烏帽子召。和田父ふ左右にして、御になをらせたまふ。……静か舞の

装束は千葉殿の御役、笛は父ふの六郎殿、鼓は工藤祐経、……武蔵の住人に長沼の五郎はと拍子の役なり。静は是にはやされて、……

吾

……二品併御台所御参鶴岳宮。以次被召出静女於廻廊、是依可令施舞曲也。……近日只有別緒之愁、更無舞曲之業由、臨座猶固辞。然而貴命及再三之間、愁廻白雪之袖、発黄竹之歌。左衛門尉祐経鼓。……畠山二郎重忠爲銅拍子。

静先吟出歌云、……（文治二年四月八日）

さて当該箇所にて重忠は『義経記』『吾妻鏡』では楽党の一員として登場する。『義経記』では重忠は「ゐんの御かむに入たりし」という理由で笛を担当する。『吾妻鏡』では重忠は銅拍子を担当する。なお参考までに述べるに幸若舞曲『静』では重忠の子息の六郎重保が笛を担当している。このように『義経記』、

『吾妻鏡』では役割は異なるが楽党の中に重忠の名を見いだせるのであるが、『義経記』では重忠の登場の仕方に向向が凝らされている。『吾妻鏡』では頼朝の再三の命によって静は歌舞を演じることになり、その後楽党が紹介されているのであるが、『義経記』では鼓打がないことを口実に歌舞を辞退しようとする静に対し、頼朝は楽党の人選を行い、「いかではたけ山ほどのけんじん第一のいやうのもの、がくとうにならんとは、かりそめなりともよいはじ」という頼朝の心配を余所に、それぞれ名声を得ている工藤祐経の鼓堀原景時の銅拍子に重忠が笛の役を務めれば「ぞくしやうただしきがくとう」になるというある種の「正論」をもつて頼朝の命に応じ、「べつして色々しくもいでた」ないが「なをえたるびなん」である重忠が舞台に最後に登場することによって頼朝が「あはれがくとうや」と賞賛する楽党が成立し、静も歌舞を演じることと決心するのである。重忠の登場により引用箇所が続く場面では頼朝も静の歌舞を見物することができ、静も義経を慕う歌を歌うことによって一度は頼朝の不興を買うにしても、無事に若宮への歌舞の奉納を行い最終的には多くの引き出物を賜うことになるのである。なお幸若舞曲『静』では、楽党の中に重忠の名を見いだせないものの、代わりに『義経記』『吾妻鏡』で北条政子が果たしている義経を慕う歌を歌い頼朝の不興を買った静を取りなす役目を重忠が果たしており、『義経記』とは異なる重忠の造型として興味深い。

四、おわりに

以上、『義経記』の畠山重忠登場箇所と他の作品の同一箇所と

の比較を通して、『義経記』における畠山重忠像の造型について概観してきた。『義経記』の中で重忠は、その人物像の造型がそれほど顕著でないa、c並びに今回考察の対象外としたgの場面を除き、おおまかにいえば各場面に於いて相手が頼朝であれ堀原景時であれ、その「よろずはばからぬ」「のこるところもなくぞ申ける」性格によってその場に応じた「正論」を述べる「けんじん」として造型されているといえるであろう。そしてその造型はそれぞれの場面において義経とその縁者を養護すると同時にその発言が「正論」であるが故にb、eでは頼朝が悪役である堀原の言説に靡いて過ちを犯すのを防ぐという意味において、d、fでは頼朝の意に叶うという意味において頼朝への忠義となつているとも考えられ、おそらくは多くの中世文芸と同様に頼朝の敵対者を同情的に描きながら頼朝に批判が向けられないという前提を大枠においては保持していると考えられる『義経記』において、その場の対立、問題を解消するのに貢献しているといえるであろう。なおこうした造型そのものは真名本『曾我物語』、仮名本『曾我物語』等における重忠像にも相似したものであり、『義経記』独自のものとはいえないかもしれないが、同一場面を持つ作品に比してそうした造型の重忠を登場させたり重忠をよりクローズアップし、物語の展開をより劇的で豊かなものとしている点が『義経記』の特徴であるといえるであろう。

注

(1) 義経像に関しては例えば川村二郎氏「小童神と義経」(『日本文学

往還」一九九三年十二月 福武書店）等、弁慶像に関しては例えば麻原美子氏「弁慶像の造型（一）——舞曲・舞の本と『義経記』をめぐる——」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』三一 一九九七・三）等。

(2) 梶原景時像に関しては例えば山下宏明氏「『義経記』の『平家物語』受容」（『国語と国文学』七三・三 一九九六・三）等。

(3) 例えば「『義経記』成長の時代」（『中央公論』一九二六・一〇）の柳田国男「『義経記』成長の時代」といった評論に代表される。「粗末な継ぎ合わせのセメント」といった評価に代表される。

(4) 「『義経記』をそれなりの志向を持った作品として評価しようとする試みとしては例えば村上孝氏「語り物の諸相——『曾我物語』『義経記』と幸若舞曲など」（『日本文学新史・中世』一九八五・一二）至文堂、三澤裕子氏「『義経記』成立論の問題点」（『曾我・義経記の世界』一九九七・二）汲古書店、刑部久氏「『義経記』の方法——義経都落ちをめぐる——」（同上）等。

(5) 使用するテキストは、現存諸本中相対的に古態を残す『判官物語』第二系列の田中本「『義経記』を底本とする高橋貞一氏編著『田中本義経記と研究 上・下』（未刊国文資料）とする。なお『判官物語』第一系列の天理大学附属図書館蔵『義経双紙』（伝承文学資料集成、流布本「『義経記』の東洋文庫蔵丹緑絵入り十二行古活字本（岩波日本古典文学大系、赤木文庫蔵『よしつね物語（貴重古典籍叢刊）の本文も比較対照したが、『よしつね物語』のいわゆる「含状」相当箇所を除き、特に問題となるような校異はない。また「含状」相当箇所に関しても、佐藤陸氏「『義経記』の一考察——判官物舞曲との交渉——」（『軍記物語とその周辺』二九六・三 早稲田大学出版部、村上孝氏「『義経記』諸本の位置づけ」（『赤木文庫本 よしつね物語』一九七四・三 角川書店）の両論に従い、後の増補として考察の対象から除外した。またaからgの章段以外に、巻第四「土佐坊義経の討手に上る事」には頼朝が土佐坊に「……わだはたけやまに仰せつけたれども、あへてこれをもちいず、九郎がみやこにみんのきしよくよきによりて、世をみだらんとするあひだ、はたけ山に仰付た

れどもちいず、川ごえの太郎はえんなればとてもちいず、しゃうそんよりほかにたのむべき物なし。……」と頼朝が土佐坊に義経の追討を命ずる場面、また巻第六「静鎌倉へ下る事」には「……しづかめしてたづねきくべきことありとて、大みやう小みやうをぞめされける。わだ、はたけ山、うつの宮、ちば、かさい、えど、川ごえをはじめとして、そのかずをつくしてさんず」と静尋問のために御家人が召集される場面に重忠の名がみえる。前者では頼朝の命を拒んだ者の名としてまず侍所別当でもあった有力御家人和田義盛と番えられたうえにbの場面を踏まえてであろうがもう一度名が挙げられ（なお、作品中和田義盛が義経追討の命を受ける場面はなく、この段階ではまだ重忠も一度だけである。中世文芸にはこのような「和田畠山」と併称するフレーズがしばしば見られるが、ここでは作品の前後の整合性を考慮せずにそうしたフレーズが使われたものであろう。）、また後者では多くの御家人の中で和田義盛に次いで重忠の名が挙げられているのは和田と番えられるフレーズとしての問題でもあろうが、作品内で重要な役割を果たすことにも依るのであろう。

(6) 各作品名は以下のように略述する。吾：『吾妻鏡』、平：『平家物語』、真：真名本『曾我物語』、仮：仮名本『曾我物語』、幸：幸若舞曲。また使用するテキストは以下の通り。吾：新訂増補国史大系、平：岩波新日本古典文学大系、真：貴重古典籍叢刊3、仮：岩波日本古典文学大系、幸『腰越』：岩波新日本古典文学大系『静』：幸若舞曲研究。なお幸若舞曲に関しては念のため様々なテキストを確認してみたが、引用箇所に関して特問題となるような校異は存在しなかった。

(7) 『平家物語』諸本でも重忠が三浦一族と合戦したのは在京している父叔父を救う為とする説明を持っている伝本は多い。詳しくは拙論『平家物語』諸本における畠山庄司重能（『国語国文』六九・五二〇〇・五）を参照された。

(8) 義経が受ける院宣の内容も、『吾妻鏡』は頼朝追討であるが『平家物語』、『義経記』は四国九州を賜るというもので一致しており両者

の関係が伺える。

(9) 刑部久氏註4前掲論文による。

(10) 頼朝は佐伯真一氏「源頼朝と軍記・説話」(『説話論集』二一九九二 清文堂、『平家物語遡源』一九九六・九 若草書房に再録)、池田敬子氏「頼朝の物語」(『平家物語受容と変容』一九九三・一〇 有精堂)等が指摘するように『義経記』においても、他の多くの中世文芸作品と同様に、基本的には主人公の敵でありながら批判されない人物として造型されているが、批判を受けている箇所も存在する。例えば巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」では義経思慕の歌を歌った静に対し機嫌を損ねていた頼朝が、静が歌を歌い直したことによって俄に機嫌を直した際に、「かるがるしくもほめさせ給ふものかな」等と批判されている。

(11) 佐伯真一氏、池田敬子氏註10前掲論文参照。

(12) 『曾我物語』における畠山重忠像に関しては、山西明氏「曾我物語在地性の変容と保持——畠山氏説話を中心にして——」(『国語と国文学』六一―二 一九八五・二)等に詳しい。

追記

小考は、軍記・語り物研究会第三二八回例会(二〇〇〇年四月二三日 於法政大学)での口頭発表の一部をまとめたものである。貴重な御教示を賜りました方々に深謝申し上げます。

(とくたけ よしあき)